2004年11月1日発行（毎月2回1日・15日発行）第8巻20号（通巻140号）
1997年3月10日第3種郵便物認可

pen

with New Attitude

11/1
2004 No.140
500 yen

2005年版

世界7カ国の目利きが選ぶ168点

プロダクト・デザインの最先端。

これを知らなきゃ、デザインは語れない！













TOKYO
東京

酒井俊彦
Toshihiko Sakai

人に美しく使われるデザインを求めて。

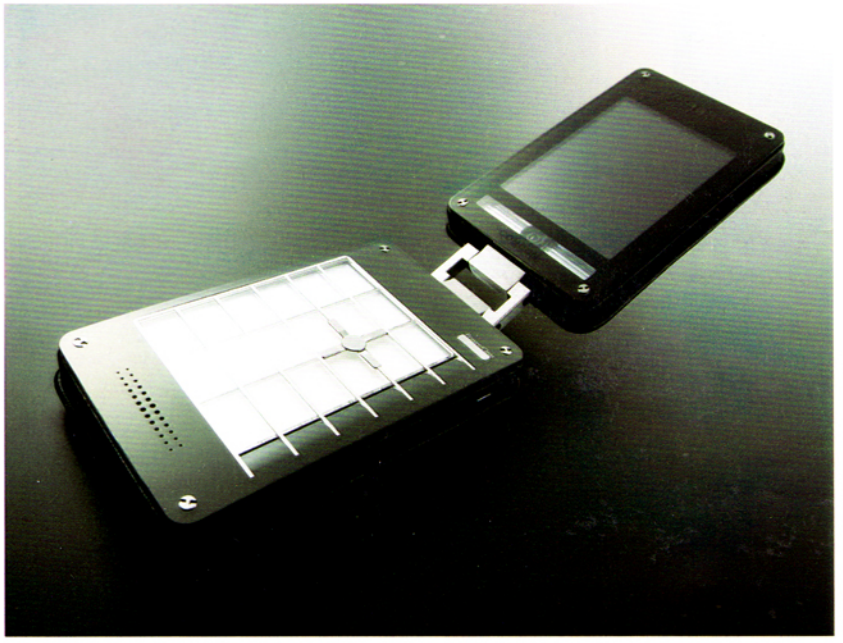
●1964年高知県生まれ。コーゾーデザインスタジオを経て、92年サカイデザインアソシエイツ設立。まだ詳細は明らかにできないが、現在、和菓子のデザインにも挑戦中。



「コムコム・プロジェクト」には白い家電のシリーズもある。「ComMic」。プロトタイプ



カフェ用にデザインした「FUMO Indoor」は、アクリル天板にツキ板を封入。受注品



最新作の一つ、「Super Remocom」。あらゆるモバイル機器をこれ1台に集約したマルチリモコンだ。プロトタイプ



レンズが180度回転し、天井にも映せる「ComProjector」。プロトタイプ



成長につれて脚の長さを調節できる子供椅子「Atom Chair」。プロトタイプ



延長コード付コンセント「ComStation Internal Double」。プロトタイプ



着せ替えカバーの付いた折り畳み椅子「Plia's Suit」。プロトタイプ

「今までに見たことのないデザインを考えてくれ、と言われることも多いんです」。酒井俊彦さんは言う。「でもね、見たこともない電気釜なんて欲しいですか？　欲しくないですよねえ？」

メーカーと共同で、新製品の開発やコンセプトモデルの製作に携わることの多い酒井さん。最先端の現場を見ているからこそ、常に新しさを求めるのは間違いだ、と断言する。世界初、世界最小といった技術の進化に合わせて、見たことのない〝最新〟がデザインにも求められる。その結果、たとえば進化の成熟した家庭用電話機は「七色に光りまくるとか、一時期はワケのわからない方向へ行ってしまった(笑)」。

嗚呼、哀しくも滑稽な顛末。いまや家電全体が、飽和状態となった機能の「行き止まり」で、デザインという新たな活路を模索している状態だ。

家電の煩雑化した機能を、デザインでわかりやすく。

この閉塞状況を打開するカギの一つは、技術の複合化にある。デジカメも携帯電話もMP3プレーヤーも、いわば小さな箱に入ったハードディスク。突き詰めれば、同じ物体だ。「全部が別々である必要はない。複合する技術も、もうできている。あとは、使う人の立場に立って、どれを組み合わせ、いかにデザインしていくかなんです」

酒井さんは近年、「コムコム・プロジェクト」という情報ネットワークサービスの開発に携わっている。家電やデジタル機器の煩雑化した機能を、デザインの力でわかりやすくしようではないかという提案だ。その一環としてデザインしたのが、マルチリモコンの「Super Remocom」。家中に転がるリモコンをはじめ複数のモバイル機器が、将来的にはこれ一つに集約できる。

上の写真、レザーバージョンのプロトタイプを見てほしい。シンプルで手になじむ大きさのボタン、ボディに対して適切なバランスのディスプレイが印象的だ。折り畳めば、革小物特有の静寂な佇まいを醸し出すのみ。

決して「初めて目にする奇抜なデザイン」なんかじゃない。黄金率のように落ち着いた知性を感じさせ、慣れ親しんだ持ちものにも似た〝安心感〟すら漂わせている。中には、未来の生活を一変させる、凄い機能が込められているというのに。

「新しいかたちではなく、モノが使われる美しい状況を作りたい。使う人のことを僕なりに考えた、その思想の結果がかたちであり、僕のデザイン」

最新技術が渦巻くなか、酒井さんは主張する。世界初だろうが世界最小だろうが、人に美しく使われるデザインでなければ、そのプロダクトは決して「新しく」はないのだ。



「A3の書類が入る格好いいカバンがなかったので」と、自分用に一点もののバッグを作ってしまった酒井さん。後ろにあるのは天板越しに影絵が浮かぶ「Partytable」。プロトタイプ。作品はサイトでチェック。www.sakaidesign.com